

# 霊山と癒し

—— 唐詩の中の天台山 ——

加藤 國安

## はじめに

今回、私は中国の聖地巡礼の一端を知るべく、愛媛大学天台山調査隊の一人として、二〇〇二年九月、中国の天台山へ行って来た。ここにその概略、ならびに天台山を詠んだ唐の詩人の先駆者たる孟浩然について述べることにする。

### 一 天台山はどんな山か

天台山の場所は、浙江省の省都、杭州から東南へ二百二十キロ、バスで直行すれば約四時間の所にある。現在は高速道路が出来ていて便利だった。我々は紹興、寧波を經由して天台県に昼頃入った。天台山は、じつは幾つもの峰々からなる山脈で、古来、風光明媚な「仏教の聖地」である。現在も豊かな自然と歴史ある文化は生き続けており、国の重点風景名勝区に指定されている。

天台山は、わが国では比叡山に天台宗を開いた最澄が入唐求法した仏教の聖地として知られる。この山が天台宗の聖地となったのは、開祖智顛（尊号・天台大師 五三八～九七）が入寂した後、隋の開皇十八（五九八）年、晋王公（のちの煬帝）が彼のために国清寺を建立し、以後、この寺が天台宗の根本道場となつてからのことだ。しかし、それ以前の天台山は、むしろ神仙の聖山として有名だった。

主な名勝地としては、まず「赤城山」がある。道教の霊山「十大洞天」の第六にあたる。その歴史は、司馬承禎（六四七～七三五）の「天地宮府図」（『雲笈七籤』巻二七）に記されたことに始まる。天台山の入り口に聳え、赤い岩肌がとても印象的だった。標高四百メートルで、山頂には仏塔が天にそびえ建つ。天台山に入るには、まずこの赤城山を通るのである。

また「石梁」は、天台山中で最も有名な名勝地である。険しい両崖に架かっている天然の巨石の橋で、長さは七メートル、幅が三十センチ程、滝の落差は約三十メートル、「石梁瀑布」とも称され、「石梁」は、古来、生死を超越した者のみ渡れるとされ、脱俗の世界の象徴とされてきた。足下は細い橋で、真下は滝壺。不動の精神と強い集中力がなければ渡ることはできない。この「石梁瀑布」の話は昔から喧伝されていて、初唐の宋之問「靈隱寺」詩にも、「天台の路に入るを待つて／余が石橋を渡るを見よ」と詠まれている。

### 二 孟浩然是隠者詩人か？

孟浩然（六八九～七四〇）といえば、「春眠 曉を覚えず」（「春暁」詩）の句で知られる。また「王孟韋柳」として、唐代を代表する田園詩人の一人でもある。あるいは李白のかの「紅顔 軒冕を棄て／白首 松雲に臥す」（「孟浩然に贈る」詩）からは、高潔な隠士像が想像される。しかし、じつは孟浩然には官途への深い失意の念が詠まれた作が少なくない。官界に挫折した後、孟浩然是越方面へ旅に出、天台山の詩を幾編も残しているのである。

天台山に行くことになったきっかけは、「孟浩然是鹿門山に隠れ、詩を以て自適す。年四十にして京師に來たり遊び、進士に應ず」（『旧唐書』卷一九〇）とあるように、開元十五（七二七）年冬、長安に赴き、進士の試験を受けたのが契機だった（劉文剛「孟浩然年譜」人民文学出版社 北京 一九九五）。しかし、開元十六（七二八）年、長安で進士の試験に應ずるものの、失敗。彼は強い敗北感に苦しむことになる。

「洛陽より越へ」	「自洛之越」
三十年間も あたふたと	遑遑三十載
文学も劍も とうとう	書劍兩無成
ものにならずじまい	山水尋吳越
	風塵厭洛京
（その憂さ晴らしに これから）	扁舟泛湖海
山水の美しい 吳越でも訪ねん	長揖謝公卿
余は 風塵の舞う	且樂杯中物
洛陽 長安は苦手でござる	誰論世上名

小舟を 一艘	
湖や海に 浮かべ	「洛自り越に之く」
いざ 公卿らに	遑遑たり 三十載
別れを告げん	書劍 兩つながら成る無し
	山水 吳越を尋ぬ
さてさて しばらくは	風塵 洛京を厭う
盃の酒でも 楽しまん	扁舟 湖海に浮かべ
だれが 虚名なんぞ	長揖 公卿を謝す
まじめに 語れるか	且く楽しまん 杯中の物
	誰か論ぜん 世上の名

かくて開元十八（七三〇）年、四十二歳頃、孟浩然是洛陽から江南方面をめざし、杭州に至り、以後、二年半、越地方を遊覧。孟浩然の鬱屈した思いは、この時目にした美しい自然の中でようやく解き放たれ、「耶溪に舟を浮かぶ」「建徳江に宿す」「七里灘を經る」「大禹寺の義公の禪房に題す」などの名篇を得ることになる。孟浩然の越漫遊の理由だが、越は、古來、謝靈運や謝朓、孫綽（「天台山上遊賦」がある）などが、その山水の勝景を詩文に表してきた地である。そこを訪ねたいという願いをもっていたこと、また天台山にいる道士の太一子に会いたいということ、さらには当時、朝廷で天台出身の道士司馬承禎の評判がさぶる高かったことなども指摘できる。

### 三 天台山詩の開拓者 — 孟浩然

孟浩然是天台山で、地上の垢をぬぐい去るようにこう詠んでいる。

「天台の桐柏観に宿る」	「宿天台桐柏観」
風まかせ 帆まかせ	海行信風帆

その航海のあと 夕方にゃ  
宿るよ 雲の上に浮かぶ  
天台山の 桐柏観に  
遙かに やってきたんだ  
仙界の趣漂う この土地に  
今 ま近で 赤城山を  
楽しむことができ 最高さ

ツタにつかまり 苔を踏み  
櫓を収め 舟を泊め  
気ままに ブラブラ  
辺りを 訪ね回りみる  
日陰で休み 桐柏観で憩い  
霊草の穂を 探してみる

鶴が鳴き  
澄んだ玉露が こぼれ落ち  
鶏が鳴き  
朝潮が 押し寄せる  
(世俗は暗いが 仙界は  
なんと すてきな所だろう)  
これからは 官吏への  
思いは捨てて さっぱりと  
煩惱の起こらぬように  
そんな日々をと 願ってる

夕宿逗雲島  
緬尋滄洲趣  
近愛赤城好  
捫蘿亦踐苔  
輟棹恣探討  
息陰憩桐柏  
采秀尋芝草  
鶴唳清露垂  
鷄鳴信潮早  
願言解纓路  
從此無煩惱

「天台の桐柏観に宿る」  
かいこう ふうはん まか  
海行 風帆に信せ  
せきしゆく うんとう とど  
夕宿 雲島に逗まる  
はる 緬かに尋め そうしゅう  
滄洲の趣  
せきじょう  
近く愛す 赤城の好きを  
つたを ひき 亦た苔を 踏み  
蘿を捫き 棹を輟め 探討を恣にす  
陰に 息み 桐柏に憩い  
しゅう と しそく  
秀を采り 芝草を尋め  
かくれい せいり  
鶴唳 清露垂れ  
けいめい しんちよう  
鷄鳴 信潮早し  
かんげん す えいろ  
願言す 纓路の解くを  
此従り 煩惱無からんことを

桐柏観は、景雲二（七一）年、道士司馬承禎により建てられたもの（崔尚「唐天台山新桐柏観頌」『全唐文』卷三〇四では、「天子、命を下に布し、新たに桐柏観を作らしむ」と記す）だが、現在では一九五八年、桐柏ダムが造られたときに湖底に沈んでしまっている。

清らかな露がこぼれている山では、霊草を探してみたり、また鶴の声を聞いたり、早朝、押し寄せる東海の潮の音を思ってみたりする。孟浩然是こうしているうちに、世俗の暗さを捨てて清らかな仙界に遊びたいと願い、官吏の道などに執着せず、さっぱりと俗気を捨て去らんとするのだ。これを機に、孟浩然是神仙への憧憬をつのらせていく。官途への深い蹉跎の末にたどり着いた天台山で、孟浩然是積年の迷妄を振り払う明澄な心境に到るのである。

「越中で天台の太一子に会う」  
せんけつ  
仙穴で 道士に会うべく  
舟を止め 拝礼に向かう  
自らに問うていう

「越中逢天台太一子」  
仙穴逢羽人  
停艦向前拜  
問余涉風水

「風 波を渡り  
遠路 はるばる来たのは  
いったい どこなのかね？」と

陸に上り 天台山を訪ぬべく  
江の流れに従い  
呉を下って来たんだ  
この山は 以前から  
ずっと敬愛してきた  
どうにかして その神霊  
問うこと できぬかと

山の上は 高い青空に通じ  
頂の下は 広い大海に臨み  
鷄が鳴く頃には  
朝日の昇るのが見える！  
神仙と出会うのは  
ここでは 毎度のことさ

赤城山の中を 行ったり来たり  
白雲の外を ぶらりぶらり  
苔の様子なんか  
俗界の物とは 全然違うし  
滝の眺めだって  
天界に属するって思える！

この感じからして  
ここが 仙界なのは  
昔から 至極当然さ  
中でも 華頂峰は  
古くから 最高よ

ああ この地で  
永遠に遊び  
いつか仙人の夢を  
実現できたらよいのに

何処遠行邁  
登陸尋天台  
順流下呉会  
茲山夙所尚  
安得問靈怪  
上通青天高  
俯臨滄海大  
鷄鳴見日出  
每与神仙会  
往来赤城中  
逍遙白雲外  
莓苔異人間  
瀑布当空界  
福庭長自然  
華頂旧称最  
永願従之游  
何当濟所届

「越中で天台の太一子に逢う」  
仙穴にて 羽人に逢わんと  
鱸を停め 前拝に向かう  
余に問う 風水を渉り  
何れの処ぞ 行邁遠しとすと  
陸に登り 天台を尋ねんと  
流れに順い 眞会を下れり  
茲の山 夙に尚ぶ所なり  
安んぞ靈怪を問うを得ん  
上は通ず 青天の高きに  
俯は臨む 滄海の大きに  
鷄鳴いて 日出を見  
毎に神仙と会う  
往来す 赤城の中  
逍遙す 白雲の外  
莓苔 人間に異なり  
瀑布 空界に当たる  
福庭 長らく自から然り  
華頂 旧くより最を称う  
永く願う 之に従い遊び  
何か当に届る所を濟さん

天台山の中腹にはかの有名な国清寺があり、多くの僧侶がいた。また上に登っていくと方広寺があり、華頂峰には華頂寺があって、それぞれ参観の機会を得た。周囲は深い山に囲まれ、唐の時代からの樹木だという大木もあって、当時の様子を想像することができた。

この詩でも、天台山が、天界のみならず海上の蓬莱とも繋がっているのだという点が強調されている。天台山のこの多層的聖地性が、他に類例のないすぐれた仙境として、盛唐の頃、広く世に語り伝えられた結果、官途に挫折した大詩人孟浩然を初めとして、多くの道士をこの山に引きつけたのだと考えられる。従来、ほとんど指摘がないが、天台山の詩は、この孟浩然によってはじめて本格的に開拓されたのである。

天台山ですっかり世俗の懊悩から解放された孟浩然は、もうこの世から足を洗ってもよいとさえ思うのだった。

「天台の道士に寄せる」  
もし赤松子に  
連れていってもらえるなら  
この人間世界から  
足を洗っても よいのだが

「寄天台道士」  
儻因松子去  
長与世人辞

「天台の道士に寄す」  
儻し松子に因りて去れば  
長く世人と辞さん

## おわりに

天台山をはじめとして、中国の聖山はほとんどが日常世界の外延部に位置し、日々の生活を行う中心部から一定程度隔たっている。つまり、それらの聖地に赴くには、必ず空間を移動しなければならない。この移動に、聖なるものに近づいていくという特別の意味が込められている。しかも山に登るのは、身体的にとってもつらい。この苦しさがまた聖なる思いを高めてくれる。が、その山に至れば、そこは仙界に通ずる「洞天福地」である。ここで心身を清め、これまでの不浄なる思いを洗い去り、自己覚醒を経るのである。こうしてきれいさっぱりとした心境になると、仙界に遊ぶ気運が昂揚し、やがて原初の聖なる存在に生まれ変わることもできる。かくして、人は俗から聖への蟬脱<sup>せんだつ</sup>を遂げる。

孟浩然の訪れた洞天福地の名山一天台山も、この地で修行すれば福を得て成仙することができると信じられた。こうした聖なる地は物静かに時空を超越し、肉体的限界を超えて悠々と自由に生きる仙界の入口だったのである。

孟浩然の天台山の諸作品は、科挙の落第という挫折を契機に、深い人間的な葛藤を通して、魂の平安・浄化を願うものとして作られた。以後、天台山の詩は、詩情豊かな癒しのイメージを濃厚に漂わせることになり、李白をはじめとして唐の多くの詩人たち、および近代の郁達夫、郭沫若、朱徳といった人々にまで、その詩情は脈々として継承されていった。